強辱
Adultonly

強辱
獣達の狂宴
そして女達の惨華
前編

テキスト　蛙雷

表紙・本文挿絵　月工仮面

テキスト朗読　如月さくら

ゆづきひな

強辱
獣達の狂宴
そして女達の散華
目次

目次

強辱　〜　獣達の狂宴〜　そして女達の惨華……

獣達の狂宴　始まり　……7

生贄一人目　敷島　小夜子　……13

生贄二人目　秋山　小百合　……25

生贄三人目　姉　〜　柊　冬香　……37

生贄四人目　妹　〜　柊　春香　……57

生贄五人目　柊　春香　〜　二巡目　……85

テキスト朗読

獣達の狂宴　始まり　……　如月さくら

生贄一人目　敷島　小夜子　……　如月さくら

生贄二人目　秋山　小百合　……　如月さくら

生贄三人目　姉　〜　柊　冬香　……　ゆづきひな

生贄四人目　妹　〜　柊　春香　……　ゆづきひな

生贄五人目　柊　春香　〜　二巡目　……　ゆづきひな

獣達の狂宴始まり

～ 獣達の狂宴 始まり ～

プロローグ （ 0-1.Prologue ）

午後7時を知らせるデジタル時計の数字に目をやりながら、物事は計画通りに行かない……と言う事を、銀行に押し入った男達は、それぞれに実感していた。彼らの計画では、今頃には銀行から強奪した金を四人で分け合って、それぞれ別途に逃亡している筈だったが、現実はと言うと、行員と客を人質に取り、銀行の中に籠城する破目に陥っていた。

男達が銀行に押し入ったのは閉店直前の午後2時55分、それから計算すれば既に銀行に籠城する事となって4時間以上もの時が過ぎている。上手く金を奪う事には成功したが、その金を奪って逃げる事に失敗した男達は、その4時間の間に銀行の内部にバリケードを築きあげ、籠城を決め込んでいた……人質にした行員と客の合計二十数名と共にである。

銀行と言う建物は、その建物の特殊性故にシャッターやブラインドを下ろし、完全に閉じてしまえば、外部からの中の様子も解らず、また外部からの進入も難しく、ましてや要所をバリケードで完全に塞ぎ、人質にした者達を弾除けと外部に対する牽制にしておけば、警官隊や特殊部隊と言った者達の強行突入も、暫くの間は防ぐ事が出来るのだが、それは逆に言えば、男達もここから出て行く事が出来ないと言う事でもあった。

銀行に押し入った男達は、すでに先行きの全てを理性では理解していた。

籠城しているからこそ、こうして無事なのであり、人質を盾にして、下手に脱出を試みようとしたならば、すぐにでも周囲を取り囲んでいる警察に捕まるか、最悪で凶悪犯として射殺されてしまい終りとなる。ならば早い所観念して、素直に逮捕された方が罪も軽くなるのでは？　無論の事、男達もそれを考えた……だが籠城している四人の男達は、逮捕される前にしておきたい事があった。

逮捕されれば、最低でも十数年は刑務所にぶち込まれる事となる。ならば、その前に男たちはやって置きたい事があった。

はたして男達は何を『やりたい』のか？

それは文字通り『犯りたい』事であった。刑務所に行く前に、刑務所の中では決して味わう事が出来ない事……女を抱くと言う事を、刑務所に行く事になる前に、男達は女と思う存分『犯って』満足させたかったのだ。

だから男達は、銀行の中に篭城し、バリケードを築き、外部からの侵入者を防ぎ、不必要で邪魔になる男性の行員と男性客だけを、差し入れに要求した食料や飲水と引き換えに解放し、残った女性行員と女性客を自分達の周囲に集め準備をした。人質にした女達を思う存分に犯す準備をだ……

不幸中の幸いと言うべきか、篭城している人数が四人だということも幸いした。四人の中の一人が、女を犯している最中でも、残りの三人が警戒していれば、外を取り巻いている警官の連中が、籠城している銀行の内部に突入する隙を与えずにすむし、内部の人質達を監視するのも容易である。順番を決めて順繰りに女達を犯して行けばいいのだ。

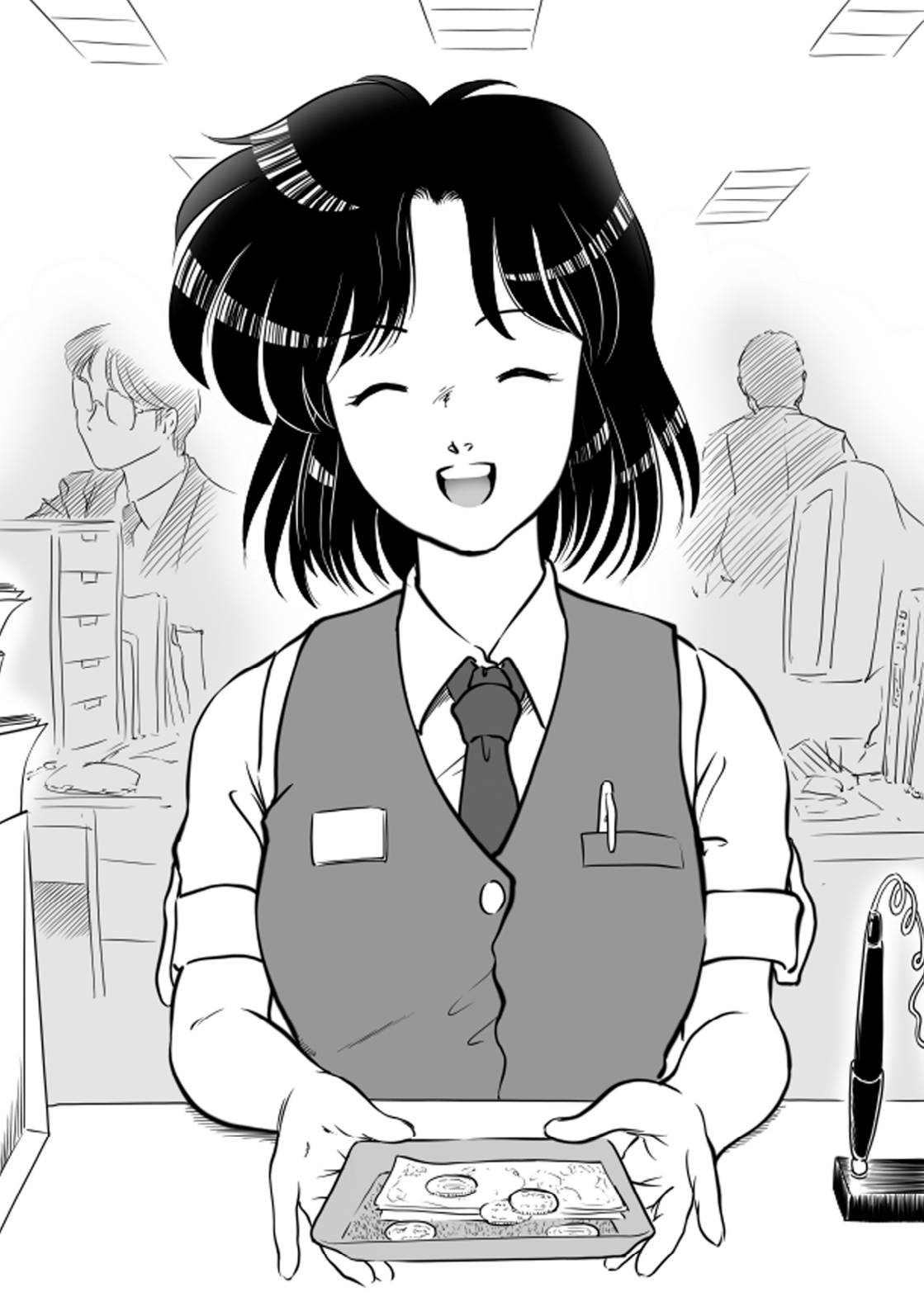
そして男達は、準備が完了した今、人質にした女達を犯す順番を、ジャンケンによって決めていく事となった。ルールは簡単、早い者勝ちである。最初にジャンケンで勝った男が、人質として集められている女達の中から、自分の好みにあった女を選んで犯す……一人目が済んだら、二番目にジャンケンで勝った男が交代して、今度はその男が好みの女を選んで犯す。

順繰りに交代しながら女を犯していき、一回りしたら再びジャンケンなり、他の手段によって順番を再度決め、再び女を選んで犯していく、満足して飽きるまで何度でもだ。

そしてジャンケンに勝った男が、最初の生贄となる女を選び出した……

最初に選ばれたのは、この銀行に勤める女子行員であり、その女子行員を選んだ男には、その女子行員を選んだ理由があった。数日前に今日の襲撃の下調べにと来た時、カウンターで微笑みながら、今日の事など想像すらせずに客である自分に挨拶をし対応していた女の姿、その優しげな微笑が強烈な印象として残っていた……ネームプレイとに書かれていた名すら思い出せる程にだ。

だから男は、あの時の優しげな微笑を壊してやりたくなっていた。その優しげな微笑を恐怖に歪ませて、泣顔へと変えてやりたくなり、その口から吐き出される悲鳴を聞きくなった……だから一番手となった男は、最初にこの女を……敷島小夜子と言う名の女を犯す事に決めたのであった。



生贄一人目〜數島
小夜子

生贄一人目

敷島　小夜子（ 1-1. Sikisima.sayoko.1 ）

「ひっ！」

集まってジャンケンをしていた男達の中の一人が、持っている銃を私の方へ向け、薄笑いを浮べながら立ち上るように命令した。

これから何が起こるのか、何をされるのか……考えまいとしながらも、考えていた私は、これから何が起こるのか、私が何をされてしまうのかを、男が私に向ける銃と視線によって全て理解してしまう。

「いや……立たない、わたし立たない、ここにいるから、わたし絶対に立たないぃぃ！」

私の方へと伸ばされる男の腕、その腕から逃れようと人質となっている他の人達の中へ潜り込もうとしたが、私の体は逆に弾き出されてしまう。

「あうっ！」

思わず人質となっている人達の方を見る。大きなお腹をした人が、私の視線から逃れる様に人質となっている人達の中へ隠れる様に潜り込んでいくのが見えた。

「ひゃぁひぃ！」

弾き出された私の服の襟首が掴まれ、そのままズルズルと、他の男達や人質から見えない奥のカウンターへと、私は引きずりこまれて行った。

「何する気なの、いやぁぁ、やめて、お願いだから、やめてぇぇーー！　放してぇ、おねがいだから、いやよぉぉ――！」

新卒の女子大生であった私は、就職難の時代と言われる昨今に置いて、この銀行に就職する事が出来たのは、非常な幸運な事だと思っていた。

しかし今こうして銀行強盗の人質となり、犯人の男に犯されてしまうと言う現実……この銀行に就職できたのは幸運などではなく、逆に不運であったのだと、男に捻じ伏せられながら、私は思い知らされる事となった。

カウンターの影に連れ込まれた直後に男に押し倒され、一気に下着ごとスカートを轢き脱がされる。

「あひぃ、ダメ！　助けて！　お願い、脱がさないでぇ、おねがいだからスカートを脱がさないでぇ、やめて、やめてぇーー！」

足をすぼめて、何とか男の眼から大事な場所を隠そうとするが、男は両足を大きく押し広げると、その広げた中心……誰にも触れさせた事のない場所、私の茂みの真ん中へと手を伸ばしてくる。

「脱がさないで、触らないでぇ、御願いだからやめて、誰かたすけてぇぇ、御願いだからやめてぇぇ、いやよぉぉー！」

伸びて来る男の手から、何とか逃れようと足掻くが、足首を掴まれ逃れる事が出来ない、足をバタつかせながら逃れようと足掻く下半身、剥き出しにされた尻が、床にぶつかりながらペタペタと言う濡れた様な音を立てる中、物心がついていらい、誰にも……両親にすら触れさせた事の無い場所へと、男の指先が侵入してくる。

「あうぅ、いひぃぎぃぃ、痛い、いたぃぃ、痛いやめてぇぇ！」

身も蓋も無い、あられもない悲鳴、それが指を突き込まれた下半身から湧き上がり、腹を突きぬけ、激しい叫びとなって口からほとばしる。

「はぁひぃ、やめて、やだぁぁ……さわらないで、指入れないでぇ、そんな酷い事しないでぇぇ、御願いしますから……おねがい……ぬいてぇぇ……」

大きく張り上げられた悲鳴が、すすり泣く様な嗚咽の言葉へと変わって行く、そして突き込まれた指先は、ネチョネチョと淫靡に蠢きだす。

「あうっ！　ぐぅぅ……ひぐっ！」

蠢き続ける指先、そして捏ねられ続ける蜜壺の周辺と内部……男は、ときおり指先を引き抜き、味をでも確かめる様に指先を舐め、べっとりと唾液を塗り込め再び内側を嬲り続けて行る。

「ひぃぅっ……ひぃっ、ひぃぃぁぁ……ひゃめて、おねらぁいだから……こんなのいやなのぉぉ……ぐひぃ！」

烈しい抵抗の声は、すでに出せなくなっていた。ただ微かな哀願の言葉を漏れ出させながら、男の慈悲を請うだけとなった惨めな自分……それが無駄な事だと知りながらも、私は懇願の呻き声を出し続ける事しか出来なかった……

女の股間を嬲り続けていた男は、上半身の服も乱暴に脱がして行く、力任せに服をを引裂く、服が破れる音が広がり、跳ね飛んだボタンが乾いた音を立てて床に転がり落ちていく

「ひぃ、やめてぇ！　服を、おねがいします。誰かぁ、誰かたすけてぇぇ――！」

引裂かれていく服の音に被さる悲鳴、そして悲鳴を上げながら、服を引き剥がされ全裸にされていく女……ブラジ

ャーが乱暴に引き伸ばされるが、収縮のあるブラジャーは容易に引き千切れない、男は舌打ちをしながら、ブラジャーを完全に剥ぎ取るのを止めて、上の方へとづり上げて、引き伸ばされたブラジャーからこぼれ出している乳房に舌を這わせ……強く吸った。

「くひぃぅ！　あぁぁぁっ……やめてください、吸わないで、いあたいぃ……うっ、うぅぅぅ……」

強く吸われる乳首の痛み、そして乳房の上を這いまわる男の舌の感触は、何か得体の知れない、ぬめぬめした生物が這い回るようで気持ち悪い……そのおぞましさに、すすり泣く事しか出来ない私の嗚咽を聞きながら、男は乳房を吸い、揉みしだき嬲りながら、更なる悲鳴と哀願の声を上げさせ続ける。

「かぁはっ！　吸わないでぇ……噛まないでぇ……やめてぇぇ……たすけて、誰かぁぁ…誰でも良いから、おねがいぃ……たすけてぇよぉ――！」

やがて、男は両足を抱え上げ、大きく開かせた。これから何が行われるのか、それを察した私は、悲鳴とも哀願とも言える声を出し続ける。

「いやいやっ！　やめてください、初めてなんです……好きな人がいるんです。だからお願いします！　やめてぇ、いやぁぁぁ――！」

涙で歪んだ視界の中、私を見ている男の顔がアップになり、次の瞬間に唇を塞がれる。

「んっ、ぶぅぅぅっぐふぅぅぅーー！」

唇を舐めまわす舌、それが顔全体に広がりながら、私を嬲る。

「んっはぁ～はぁぁ～……」

離れて行く男の顔と、喘ぐ様な声を出し続ける私、そして離れて行った男の顔は、押し広げられたままの私の下半身へと押し当てられた。

「ひぐぅ！」

男の指先で散々に嬲られた場所、そこが舌先で再度嬲られる。

「いあぁぁ……やめて、御願いしますから……たすけてぇ、たすけてぇ……おかぁさん、たすけてよぉ……たすけてぇ――、おかぁぁさぁぁん！」

泣き叫び、母親に助けを求める女の声、それを快感にしながら、男は舌で丹念に女の股間を舐め上げる。唾液だけではなく、女自身が染み出させ始めた汁も混ぜ合わせ、念入りに女の股間へと塗りつける……まるで、それが女に対するせめてもの慈悲とでもいう様に、ベチャベチャと隠微な音を立てながら執拗に……

続きは製品版にてお楽しみください